

2020年11月5日(木)

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第205次)

記者発表資料

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

※ 現地見学会を11月7日(土) 11:00~15:00に実施します。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、定時説明はおこなわず、随時質問にお答えします(少雨決行)。

※ 駐車場はありません。

所在地：奈良県橿原市高殿町

調査面積：1,505 m²

調査期間：2020年5月25日～継続中

【概要】

藤原宮大極殿院東面回廊および内庭東北部を調査し、回廊の柱位置や先行四条条間路の側溝などを確認した。今回の調査により、大極殿院回廊東半部のほぼ全域の調査を終え、回廊の柱配置や造営から廃絶に至る経緯を明らかにすることができた。

大極殿院東面回廊および内庭東北部の様相が解明されたことは、藤原宮大極殿院の構造および古代宮都の今後の調査研究に関して、重要な成果である。

1. 調査の経緯と目的

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿がある。

この大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元図を作成している。奈良文化財研究所は日本古文化研究所の復元案を検証するため、1977年度に大極殿北方(藤原宮第20次)、大極殿院西門(第21次)の調査を実施した。近年は大極殿院の全容解明を目的として、回廊ならびに内庭の調査を継続的に進め

ており、2001・2016年度に東門および東面回廊（飛鳥藤原第117次・第190次）、2007年度に南門（第148次）、2009年度に南面回廊（第160次）、2017年度に回廊東北隅（第195次）、2018年度に北門および北面回廊（第198次）の調査を実施してきた。これらの調査により、大極殿院各門の規模と構造が明らかになるとともに、大極殿院内庭は最終的に礫を敷いて整備されていることが判明した。そして、2019年度には、東面回廊に取付く大極殿後方東回廊を発見し（第200次）、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画との類似性が強まった。

今年度は、東面回廊のうち大極殿後方東回廊より北方の規模と構造の解明、ならびに大極殿院内庭における建物の有無などの確認を目的として、大極殿院東北部の調査をおこなった。なお、今回の調査区は、調査区北部で第195次調査区、北西部で第198次調査区、南部で第200次調査区と一部重複する。

2. 調査の成果

(1) 藤原宮期の遺構

東面回廊 礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊で、調査区の東部で検出した。回廊基壇は、橙褐色粘質土を版築状に積み上げて造成している。今回の調査区では、棟通りおよび東側柱通りにおいて、桁行7間分、礎石据付穴16基をあらたに検出した。柱間寸法は、桁行が3.8～4.0m（13.0～13.5尺）で13.5尺を基本とし、梁行が約2.9m（10尺）である。据付穴は、遺存状況の良いもので直径1.3m、深さ0.2mの大きさを有し、穴のなかに根石として拳大の礫を詰めている。

なお、回廊の西側柱通りでは、据付穴などの明確な痕跡は確認できなかった。後世の耕作により削平されたものと考えられる。また、基壇外装も、後世の削平を受けて失われたものとみられ、据付痕跡や抜取痕跡などは検出できなかった。

今回の調査により、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊と北面回廊の間は桁行総長約47.1m、12間であることが明らかになった。当該部分の桁行寸法は、3.8～4.0m（13.0～13.5尺）で、大極殿後方東回廊より南方の東面回廊が、約4.1m（14尺）を基本としているのと異なる。

内庭 大極殿院内庭では、直径3～15cm大の礫を敷いていることを確認した。とくに調査区の西北部および後述する先行四条間路南側溝の上層では礫敷の保存状態が良い。なお、今回の調査では、内庭で建物の明確な痕跡は確認されなかった。

(2) 藤原宮造営期の遺構

整地土 大きく2層の整地土を確認した。下層は暗褐色土で、最下部に木屑や砂の堆積を含

み、上層は黄褐色土である。両層の間に凝灰岩粉を確認できる場所もある。

南北溝 1 幅約 0.5m、深さ約 0.2mの素掘溝で、東面回廊東側柱通りの約 3m東方を南北にのびる。第 195・200 次で確認した南北溝 SD9480 と同一の溝で、あらたに約 30.5m分を検出した。

南北溝 2 幅約 0.8m、深さ約 0.4mの素掘溝で、東面回廊棟通りの約 6 m西方を南北にのびる。第 195・200 次調査で確認した南北溝 SD11512 と同一の溝であり、あらたに約 30.5m分を検出した。

土坑 1 調査区の東北部で検出した。南北 1.6m、東西 1.4m、深さ 0.4m。埋土から多量の瓦が出土した。

土坑 2 調査区の東辺部で検出した。南北 8.0m、東西 2.8m以上、深さ 0.5m。埋土に瓦・凝灰岩粉などを多く含む。

土坑 3 調査区の東南部で検出した。南北 0.6m、東西 0.7m。埋土から多量の瓦が出土した。

(3) 藤原宮造営前の遺構

先行四条条間路 調査区北部において、藤原宮造営前に敷設された東西道路の南北両側溝を検出した。第 20 次調査区で検出した先行四条条間路 SF1731 と、北側溝 SD2076、南側溝 SD2075 にあたる。ともに素掘溝であり、北側溝は約 1.6m、深さ 0.5m以上、南側溝は幅約 1.6m、深さ 0.4m以上で、溝の心々間距離は約 6.0mである。藤原宮の造営に際し、これらの両側溝は埋め立てられた。南側溝にあたる部分は埋立土が沈下しており、上層の整地土・礫敷・瓦堆積が落ち込んでいた。

(4) 藤原宮廃絶後の遺構

瓦堆積 東面回廊基壇の高まりに沿って、多量の瓦が堆積する状況を確認した。基壇の高まりの西外方および東外方の瓦は、藤原宮廃絶直後に廃棄されたものが主体と考えられ、基壇上に堆積した瓦は、奈良時代以降、基壇が削平された後に敷かれたものである。

礎石移動痕跡 東面回廊棟通りの 1.5～2.0m西方において、前述の瓦堆積の上面に、基壇土由来と考えられる橙褐色土が堆積し、その表面に花崗岩粉が固着している状況を 3 か所で確認した。基壇が削平され、その上面に瓦が堆積した段階においても、回廊の礎石のうち、いくつか当初位置に残っており、後に、それらの礎石を移動させた場所を示す痕跡と考えられる。

土坑 4 調査区の中央部において、整地土の上面で検出した。南北 2.6m、東西 1.0m以上、深さ 0.4m以上。埋土から瓦片などが多く出土した。

(5) 出土遺物

調査区全域から瓦および土器などが出土した。特に藤原宮期の瓦が多い。

3. まとめ

(1) 大極殿院回廊東半のほぼ全域の調査を終え、回廊の規模と構造が判明した。

今回の調査によって、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊と北面回廊の間は 12 間で割り付けられており、桁行は 13.5 尺を基本としていることが判明した。

これまでの調査で、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊より南方は、基本的に桁行 14 尺で割り付けていることが分かっている。北面回廊・南面回廊も桁行 14 尺を基本としており、東面回廊のうち大極殿後方東回廊より北方のみは、それよりやや狭い間隔で柱が配置されていたことが確認できた。大極殿後方回廊の北と南で計画や造営の過程が異なっていた可能性がある。

また、今回の調査で、大極殿院回廊東半のほぼ全域の調査を終えた。東面回廊はほぼ中央に、桁行 7 間、梁行 2 間の東門が開き、門の南方が桁行 17 間、門の北方が桁行 19 間（北面回廊・南面回廊の接続部を含む）であることが明らかになった。

(2) 大極殿院内庭東北部では、建物の明確な痕跡は確認されなかった。

2019 年度に実施した第 200 次調査において、大極殿の後方に東西方向の回廊を発見したことで、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画の構造の類似性が明らかになった。前期難波宮では、内裏後殿の東に脇殿があることが分かっており、今回の調査では、藤原宮にもそれに相当する建物が存在するかどうかの確認を、調査目的のひとつとしていた。

しかしながら、今回の調査では、前期難波宮の内裏後殿脇殿に相当する明確な遺構は検出されなかった。藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画は類似性がみられる一方で、建物配置には相違があることが判明した。この点は、古代日本の宮都の変遷を考える上で重要である。

来年度以降の調査では、前期難波宮内裏後殿に相当する遺構の有無を明らかにしたい。

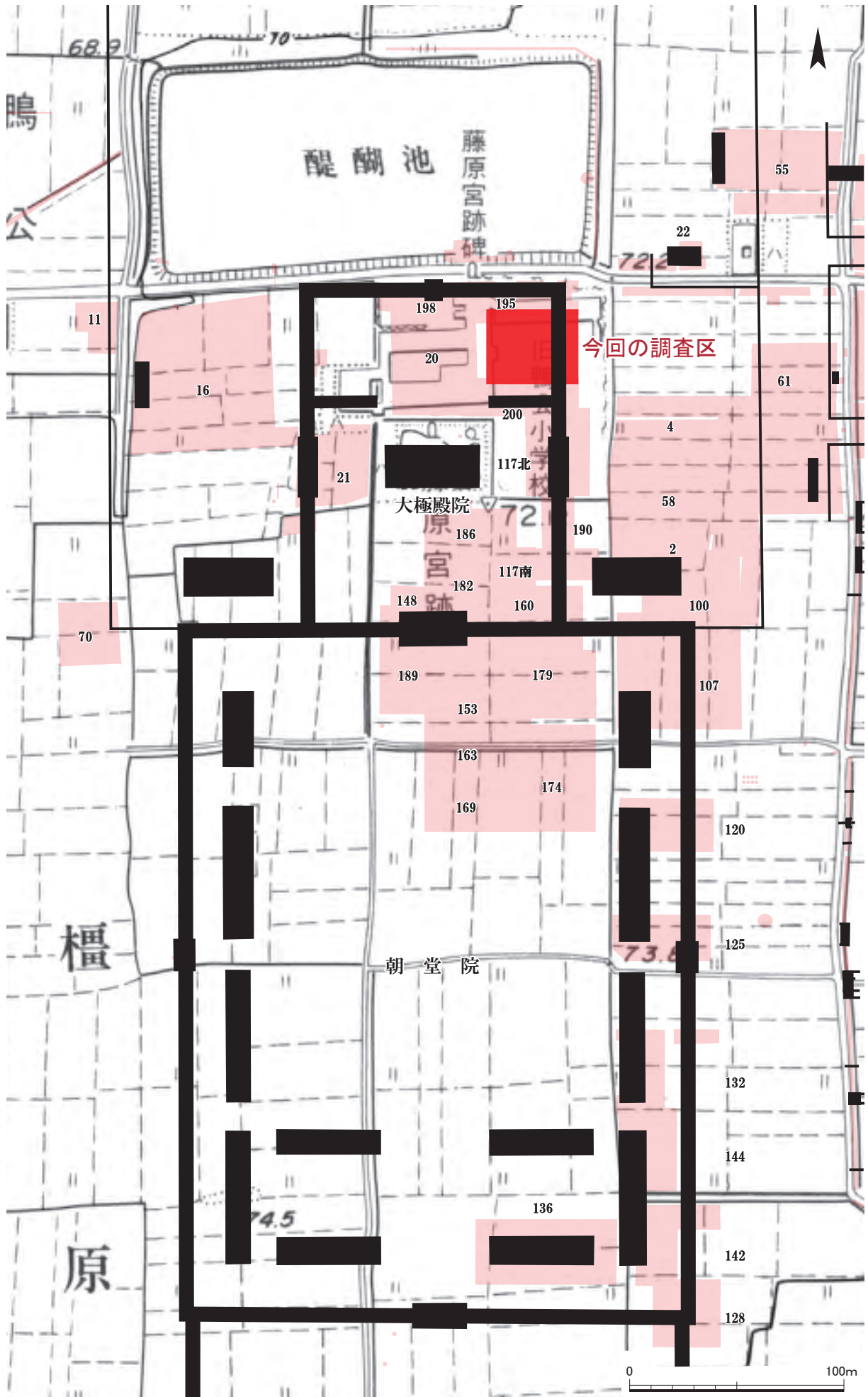


图1 調査位置図

東面回廊

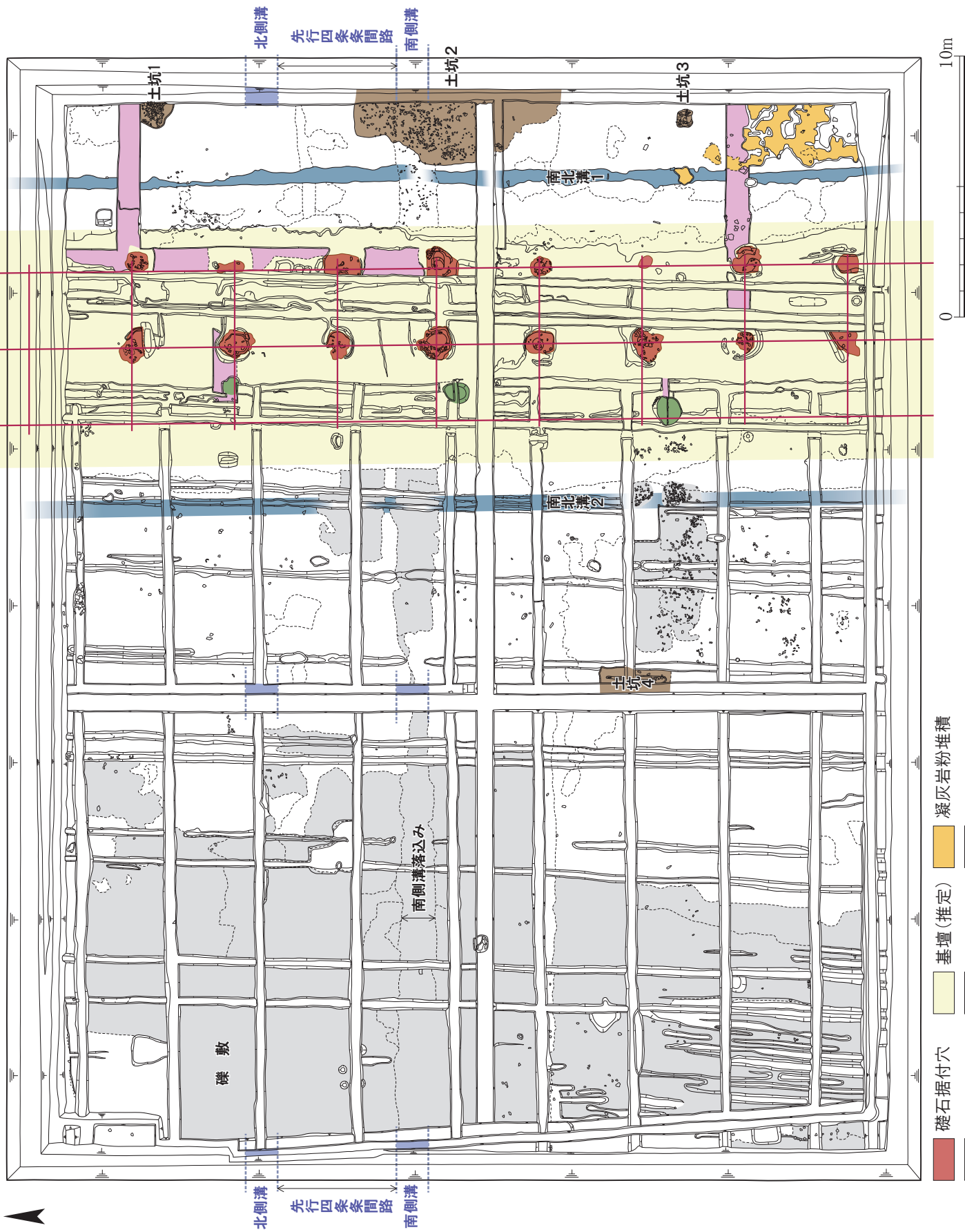


図2 飛鳥藤原第205次調査遺構平面図

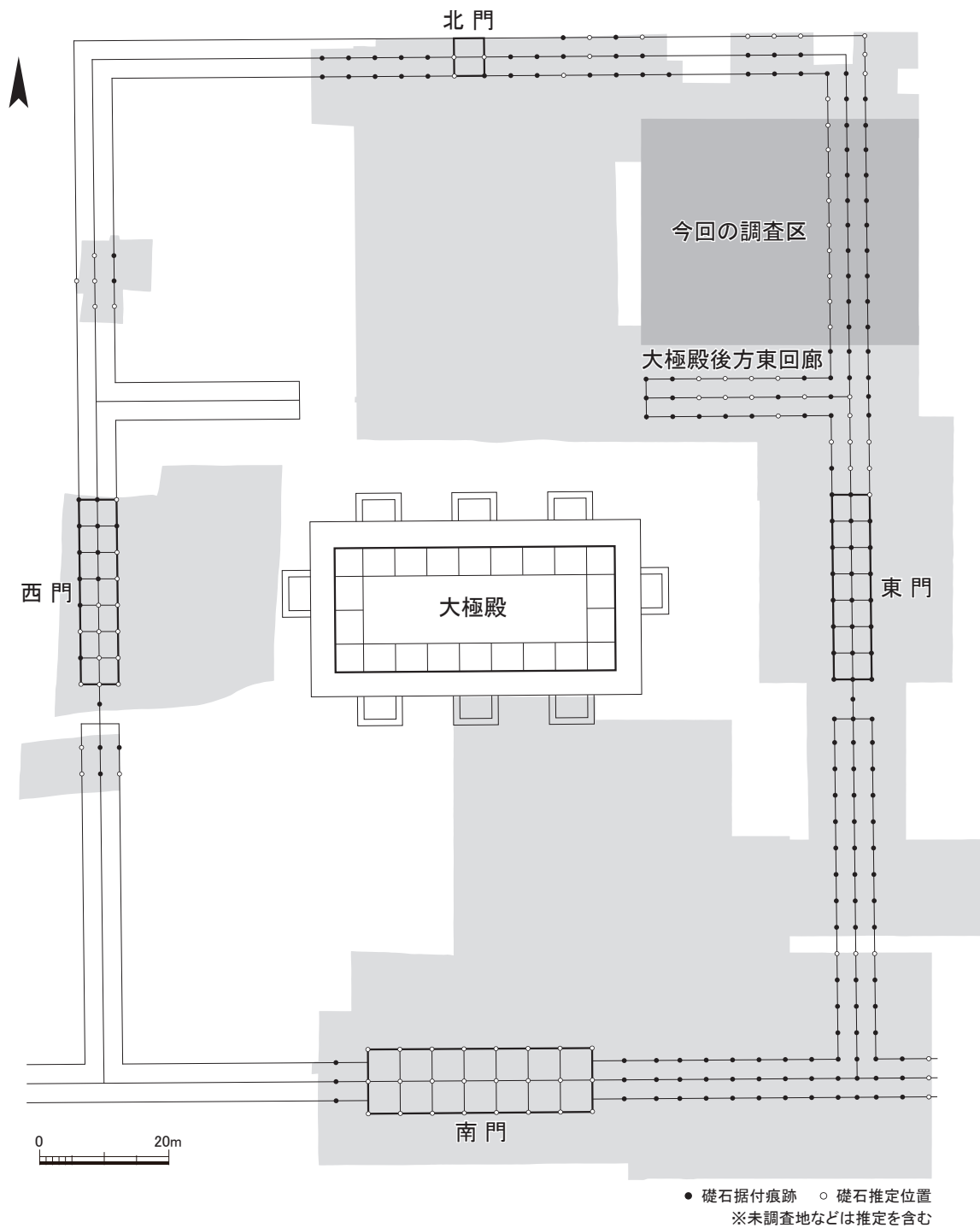


図3 藤原宮大極殿院柱配置模式図